（別紙様式１）　**令和7年度　学校評価（自己評価）及び学校関係者評価報告**　　学校名〔京丹後市立丹後中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
○確かな学力の育成と生徒自ら学習に取り組む授業づくり ○豊かな心と健康な体をはぐくむ教育の充実 ○進路指導の充実 ○信頼される学校づくり ○保幼小中一貫教育の推進による教育活動の充実	「本気で本物に挑戦する」の合言葉を学校風土として確立させ、年間とおして挑戦意欲を持ち学校生活を送らせることができた。結果、授業や行事等で探究心や課題を解決するねばり強さが身に付いた。また、仲間を思いやる集団力も育ってきた。 さらに目指すべき事項として、新たな時代に対応できる自己肯定感や自己有用感をより高め、自己の将来に希望を持ち、共に協力しながら自己を高め、積極的に取り組む力をつけさせたい。	生徒ひとりひとりが高みを目指し、生き生きと挑戦する学校を創る ～生徒と教職員が一丸となり、「本気で高みに挑戦する」を合言葉に進める～ ○生徒が自らの可能性に様々な機会を捉えて挑戦することを促す。 ○それぞれの教育活動（学習・行事・取組等々）のねらいを明確にし、生徒が主体的に行動することで、高みを目指す。

評価項目		重　点　目　標	具　体　的　方　策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	・個に応じた指導の充実に努め、「読むこと」「書くこと」「発信すること」を重点に言語活動の充実によって思考力・表現力等を伸ばす。 ・互いの個性を認め合い、互いが高まり合うコミュニケーション能力の育成を図る。 ・ＧＩＧＡスクール構想に則った一貫性・連続性のある教育課程を編成し、カリキュラム開発を行う。	・朝読書の時間を活用した「書くこと」に特化した取組を年間通して実施する。 ・ＩＣＴを活用したドリル学習の実施と家庭学習の確実な定着を図る。 ・全ての教科でＩＣＴ機器の活用のスキルを高め、生徒指導上の実践上の４つの視点を生かした授業改善を行い、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。 ・発達段階に応じた指導目標に基づき、指導と評価の一体化した取組を、ＩＣＴを活用した指導を中心に進め、系統性のある一貫した授業づくりを研究する。	○集中タイムとして、新聞のコラムや百マス計算を行い、静かな環境で集中して鉛筆を使って取り組むことにより、書く量が増え大きな成果があった。文字を書くという活動を習慣づけることがやはり必要である。 ○教職員校内授業研の実施により個々の教員が授業改善に向けて試行錯誤するとともに、その学びを共有し、新たな実践を獲得する場として、ねらいをもって実施することができた。学園としての学び合いの機会も増え、授業改善に向けて取り組もうとする風土ができてきた。 △ICT を活用したドリルは、集中して課題を選択して自ら取り組める生徒と何となく答えを選択するだけの生徒との間で差がある。力をつけさせるための有効な活用方法の検討が必要である。一方で英語の課題は音声付きのものも多く、イヤホンで自分の声を発信するなど、ICT ならではの利点があり、有効に活用することができた。	・ICI の活用とともに書くことについて、地道に進めていただきたい。 ・漢字の書き順は書いて覚えないと身に付かないと思うので、書くことの指導を大切にしていただきたい。 ・クロムブック等での入力について、できる子とそうでない子がいるように聞くが、個人差が生じることに対しての指導は大丈夫なのか。

	生徒指導	・配慮を要する生徒の背景を多面的にとらえ、いじめの防止対策の充実や不登校生徒に対する学びの保障に努める。 ・育てたい力を共有し、教職員の学級経営力の向上を図る。	・日常的な生徒への寄り添い指導や教育相談月間などを全教職員で丁寧に行い、生徒との信頼関係づくりを進める。 ・いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、いじめ調査の結果等を基に丁寧な組織的対応・指導に努める。 ・10 月のオ―ストラリア留学生との交流会の取組を通して「将来の社会的自立」に向けたキャリア教育を進める。	○生徒指導部会、教育相談部会、いじめ防止対策委員会などにおいてきめ細かく生徒の状況を把握し、組織として支援体制を築くことができた。 ○相談タイムでは全教員で体制を組み、生徒の内面を把握できた。自己肯定感や自己有用感が高まるきっかけとなった。。 ○10月のオーストラリア留学生交流会の取組をはじめとして、「本物」の場面を設定したことで、個々の表現・発信する力を伸ばすことができた。 △自己の現状を見つめる「メタ認知」が弱い生徒が見られる。 △不登校傾向生徒の支援について、学習保障の面ではより一層の努力が必要である。	・海外生徒との交流は非常に良い取組である。全ての生徒が交流できる場としても評価できる。インバウンドにより諸外国の方が訪れる時代の中、会話できる力は大切であり、今後もこのような機会があればありがたい。 ・今回の交流はどのような経緯で丹後中が決定したのか。今後は京丹後市としての広がりはあるのか。
	健康・安全	・心身ともに鍛え、忍耐力・挑戦意欲などの心の強さを育て、学習意欲にもつなげる。 ・安心・安全な生活の確立に向けて、丹後学園全体で取組を行う。 ・自分や周りの人の命を守る安全教育を行う。	・体育系・文化系部活動での充実と併せ、全ての場面で高みに挑戦する心を持たせ、目的を達成しようとする態度と豊かな心の育成を図る。 ・丹後学園一貫 PTA・丹後学園運営協議会等との連携を強め、あいさつ運動（ＮＨＤ）や登下校指導を継続する。 ・定期的な安全点検の実施と命に係る授業を実施する。救急救命講習の実施。	○生活安全部の立ち番を年度当初に計画し、保護者の方々の協力を得ることができた。 ○全校生徒対象に、心配蘇生法の講習会ができた。自他ともに命を守ろうとする意識を高めることができた。 △定期的に安全点検が実施できなかった。	・年度初めの講習会は命にかかわる事でもあり、良いことである。 ・安全に対する件は確実に実施していただきたい。担当者を確実に決めるなどして、組織づくりを行って欲しい。

	開かれた学校づくり	・保護者、地域への学校公開等を計画的に行い、地域と共にある学校教育を目指す。 ・学校・家庭・地域との相互の連携を図り、生徒の様子や学園・学校の教育活動を発信していく。 ・地域人材の積極的な活用を行う。	・学校参観を保護者や丹後学園運営協議会の委員など、広く地域の方々へ呼びかけ、いただくご意見や感想を学校経営に活かす。 ・「丹後学」などで探究を進め、地域へ積極的に出かけ、学校だよりや地域回覧、学校ＨＰへの掲載を通じて、地域活動の取組と地域連携の両方を発信し啓発を行う。 ・地域学校協働本部等を活用し、支援ボランティアを積極的に活用する。	○民生児童委員協議会、保護司会、更生保護女性会の皆様を招いての授業参観・懇談会を年２回実施。多くの地域の声を聞かせていただき、学校運営に生かすことができた。 ○学校だよりを月１回発行し、学校での取組の様子を地域へ発信できた。 ○学校支援ボランティア（部活動指導・読み聞かせ）を多く活用した。特に部活動指導では年間通してお世話になり、生徒の競技力向上につながった。 △参観された方からのアンケート回答率が低く、意見を聞かせていただく数が少なかった。	・地域の方は学校での様子を知りたがっておられる。できるだけ、案内を配付されたり、ホームページに行事等の紹介をされたりして、啓発していただきたい。 ・アンケート回収は二次元コード等の活用もさらに広げてみてはどうか。 ・アンケートから、生徒が先生に質問しやすいかの回答が低かった件で、先生と生徒とのコミュニケーションを解決しないと学力は伸びないんではないか。質問しやすい環境づくりを期待したい。
	特別支援教育	・人権教育をベースとして、生徒個々の特性についての理解を教職員間で共有し、一人一人の特性にあった支援を、全教育活動を通じて行う。 ・丹後学園や関係機関との連携を丁寧に行い、指導の充実を図る。	・特支学級の生徒と通常学級の配慮を必要とする生徒に対して具体的にアセスメントし、個々の課題に応じた指導・支援を保幼小中の一貫性・連続性を大切にして行う。全教職員で課題共有をし、定期的に校内委員会を開催し、組織的な支援を行う。 ・丹後学園内の連携や専門的見立てなどをもとに、校内研修や学園研修会などの充実を図る。また、切れ目なく学ぶことができる教育を進め、子どもの自立へ向けた適切な支援により認知能力と非認知能力の一体的な育成を目指す。	○特支学級の生徒と通常学級の配慮を必要とする生徒に対して具体的にアセスメントし、個々の課題に応じた指導・支援を保幼小中の一貫性・連続性を大切にして支援することができた。定期的な校内委員会や部会を持つことはできなかったが、日々の職員室での交流で同じ方向性で支援できた。 △定期的に部会が持てるよう、時間割内に設定するべきだった。 ○丹後学園内の指導連携や医療との連携などを組織的に行い、生徒への指導が充実した。 △校内研修は夏に１度しかできなかった。	・今後も子どもたちにとって安心した学校づくりをお願いしたい。
次年度に向けた改善の方向性		・学園共通学習指導の重点「子どもの主体的な学びの変容」を重点とした研究を進めていく。（児童生徒の状況交流と指導法） ・令和８年度より１園、１小、１中となる。より密な学園の連携を構築し、生徒が「自ら挑戦」する意欲と行動力を育成する。 ・学力における基礎・基本の定着に対して、小学校と連携しながら確実に身につけさせる。 ・個々の生徒に寄り添う指導を組織的に行い、不登校や不安を抱えている児童生徒が学校に来やすい環境整備と指導体制を整える。			・年度ごとの方向性を明確にして、教育を推進していただきたい。